

巻頭言

地球から人へ

沖 大 幹



科学技術の発達によって人間は思うがままに自然を改変し制御できるようになった、という科学技術万能主義があっけなく崩れたのは1960年代である。人間活動による環境劣化のせいでいずれ人類も減じる、あるいは地球環境にとっては人間の存在は害悪である、といった環境保全至上主義が世界的な公害問題の深刻化や、核戦争のリアルな脅威のもとで広まった。

こうした世界観は20世紀後半を通じて維持され、1990年代になると、冷戦の終結を受け、国際社会が立ち向かうべき新たな共通の脅威としてオゾンホールや熱帯林の減少、生物多様性の喪失などの地球環境問題が取り沙汰されるようになった。中でも、エネルギー安全保障をめぐる思惑もあって、地球温暖化が中心課題として大きくクローズアップされ、「地球を守る」ためにはこれまでの生活を悔い改め、豊かさや快適さを犠牲にしても「地球に優しい」暮らし方へと転換しよう、という贖罪的な論調が主流となった。

しかし、一方で、生物多様性に関してはどれほど気候変動と同様に優れた科学研究が進み、楽観視できない将来展望を記した報告書が提出されても、国際会議が開催され条約が締結されるだけで国内外の世論は冷淡であった。こうした流れを受け、生物多様性に絶対的な価値があるというよりは、水や空気の浄化、食料供給、自然災害被害軽減、あるいは新薬の材料の提供といった人類へのメリット、生態系サービス、があるからこそ生態系を守らねばならない、という風に説明されるようになった。つまり、生物多様性が維持され生態系が環境変動に対して強靱であることが人類にとっても有益である、という人間中心主義への転換が21世紀への変わり目に生じたのである。

こうした世界的な意識転換に伴い、北極のシロクマの棲家が奪われてしまうからとか、世界各地の森林が気候変化に追従できないから、といった自然生態系への直接影響だけではなく、地球温暖化が人間社会にどのような利益不利益をもたらすのかに関する詳細な情報

提供が求められるようになった。洪水や干ばつの頻度増大や激化、食料生産や発電への影響が詳細に推計されるようになると、そうした被害や変化の悪影響を最小限に抑えようとする地球温暖化への適応策が議論されるようになった。二酸化炭素やメタンなどのいわゆる温室効果ガスの排出削減を目的とする緩和策の議論に終始していた21世紀初頭までとは大きく変化したのである。

さらに、防災や農業開発などの適応策に関する議論は、地球温暖化の悪影響を相対化することにつながった。すなわち、以前だと地球温暖化がある程度以上進行したら人類は滅亡してしまう、といったある意味盲目的な地球温暖化対策至上主義であったのが、水や食料の安全保障、エネルギーや鉱物資源の枯渇、疫病、化学物質への暴露、あるいは戦争といった様々な社会的リスクのひとつとして地球温暖化の脅威が捉えられるようになったのである。

もちろん、今でも地球環境の保全の方が人類の持続的開発よりも大事であると極論する方々もいるだろうし、エネルギー安全保障のために地球温暖化問題を利用していった勢力にとっては想定外の方向への進展かもしれない。しかし、すでに日本でも世界でも、地球温暖化を始めとする地球環境問題をリスクマネジメントの枠組みで捉えなおす動きが性急に進んでいる。地球温暖化の進展に伴って懸念される被害が温室効果ガスの排出削減などの対策によってどの程度削減できるのか、という費用便益分析が検討されている。人類の持続可能な開発にとってどんな地球環境保全策がどの程度役立つのか、が冷静に議論され始めているのだ。まさに、地球から人へ、である。地球環境の保全という持続可能な開発の手段が20世紀後半には自己目的化していたとみることもできるだろう。

詳細は2012年6月に発売された拙著『水危機ほんとうの話』(新潮選書)をお読みいただくと幸甚である。